

林田 庸総 氏の学位論文審査の要旨

論文題目

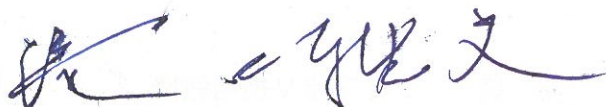
BED アッセイを用いた HIV 感染症の早期診断の動向解析 (Trends in early diagnosis of HIV infection analyzed by BED assay)

Human immunodeficiency virus (HIV) 感染症の早期診断および治療は、acquired immunodeficiency syndrome (AIDS) の発症を防ぐこと、そして感染の拡大を阻止することに対して極めて重要である。しかしながら日本では多くの場合は HIV に感染した時期を特定できないため、HIV 感染症の早期診断が促進されているかどうかは通常分からない。申請者は、東京において HIV 感染症の早期診断率を、BED アッセイ法を用いて解析することにより、明らかにしようとした。

対象者は、2002～2010 年に、HIV 陽性が判明してから 30 日以内に国立国際医療研究センターエイズ治療・研究開発センターを受診した、抗 HIV 治療未経験 809 名で、その保存血清または血漿を用いて、BED アッセイという手法により抗 HIV 抗体陽転から平均 197 日以内の早期診断例であるか否かの判定を行った。その結果、809 例のうち 197 例 (24.4%) が早期診断例であった。早期診断例の年次推移を見ると 2008 年が 31.9% で最も高かった。2002～2006 年、2007～2008 年、2009～2010 年の 3 期間に分けて解析したところ、推定感染経路が同性間性的接触である群は異性間性的接触の群よりも 3 期間の全てにおいて早期診断例の割合が高かった。本研究の対象者の 85% を占める men who have sex with men (MSM) において詳細な解析を行うため、MSM を 29 歳以下の群、30～39 歳の群、40 歳以上の群の 3 群に分けて 1 年毎の早期診断例の割合を調べた。29 歳以下の MSM の群では早期診断例の割合は 35% 前後と高かった。一方 40 歳以上の MSM の群では早期診断例の割合は 10% 前後で他の群よりも低かったが、2007 年、2008 年に急上昇し、30 歳～39 歳の MSM の群を上回った。だがその後 2009 年以降は、再び低い割合となった。また HIV 検査の経験の有無や受検頻度が早期診断例に有意に関係していた。これらの結果から、東京において 2007 年と 2008 年は早期診断率が高かったが、2009 年以降は HIV 検査件数の減少に伴って早期診断率も減少したことが明らかとなった。

審査では、1) BED アッセイ法を用いた早期診断率に関する方法論、2) 本研究の目的に関して、3) 本研究結果から考えられる HIV 検査率と早期診断例の率との関連などの質疑があり、申請者は、ほぼ適切に回答した。本研究は、HIV-1 感染症の拡大阻止や AIDS 発症予防のための効果的な対策を立てる上での一助となることが期待され、学位授与に値すると評価された。

審査委員長 エイズ学 I 担当教授



審査結果

学位申請者名： 林田 庸総

分野名またはコース名： エイズ先端研究者育成コース

学位論文題名： BED アッセイを用いた HIV 感染症の早期診断の動向解析
(Trends in early diagnosis of HIV infection analyzed by BED assay)

指導： 岡 慎一 客員教授

判定結果：

可

不可

不可の場合： 本学位論文名での再審査

可

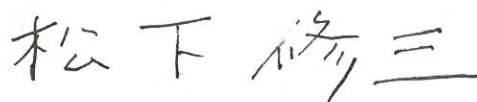
不可

平成24年 2月10日

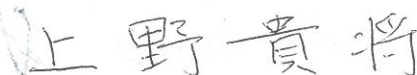
審査委員長 エイズ学Ⅰ担当教授



審査委員 エイズ学Ⅱ担当教授



審査委員 エイズ学Ⅴ担当准教授



審査委員 エイズ学Ⅵ担当准教授

